

研究主題 ふるさとを愛し 未来を切り拓く たくましい児童生徒の育成を目指した魅力ある学校づくり
～協働的な学びの推進を目指し 地域や学校をつなぐ副校長・教頭の役割～

提言者：唐津地区教頭会 七山中学校 野崎 愛子

1 主題設定の理由

子ども達が生きる未来は、少子高齢化、人口減少、財政難等の深刻な課題、地方消滅という危機を抱えている。「誰かが何とかしてくれる」のではなく、学校と地域が「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という学習指導要領の目標を共有し、協働していく必要がある。

唐津地区には、唐津市に中学校18校、小学校30校、玄海町に義務教育学校が1校ある。コミュニティースクールは1中学校区である。小学校のうち、7校が1学年1学級校、11校が複式校で、全体の6割を占めている。小学校の統廃合が進んでいるが、児童数の減少は続く見込みである。そのような中で、児童生徒の多様な他者との協働的な学びをいかに担保し推進していくかは大きな課題であり、地域や学校をつなぐ副校長・教頭の役割もまた重要である。

そこで、児童生徒の協働的な学びを推進していくために、地域や学校をつなぐ副校長・教頭の役割とは何かを探ってきた。2年目の研究は、1年目に明らかになった副校長・教頭の役割をさらに整理・焦点化し、地域と学校の協働的な学びについて研究を進める。子ども・保護者、地域だけでなく、教師にとっても魅力ある学校づくりを目指していきたいと考え、本研究主題を設定した。

2 研究のねらい

研究1年次に明らかになった副校長・教頭の役割のうち、地域と学校の「連絡調整」の業務に焦点を絞り、どのように地域と学校をつなぐべきかを明確にし、実践することで、協働的な学びを推進する。

3 研究計画

(1) 1年次

3年間を見通した研究主題・研究計画の検討、各学校での取組の集約、現状の把握と副校長・教頭の役割の分析、次年度の取組や研究方法の検討

(2) 2年次

各学校での取組の集約、課題の焦点化、共通実践内容の検討、実践後の集約、次年度の取組の検討

4 研究の概要と成果

(1) 研究の仮説

地域と学校の「連絡調整」の段階において、副校長・教頭が、活動の「ねらい」を明確化し、育てたい子ども像を共有できるように地域と学校をつなぐ手立てをとることで、児童生徒の多様な他者との協働的な学びが推進されるであろう。

(2) 研究の実践 (R5)

① 協働的な学びの取組の集約

はじめに、1年次の研究で使用された様式を使って【図1】各校の実践についてまとめ、資料を持ち寄った。各校の実践例をもとに、教頭としての関わり、課題や改善策などについて情報を共有したところ、学校規模や校種によって、教頭の役割や関わる範囲、関わり方が違うことがあらためて分かった。

〇〇 小・中学校	教頭
1 学校概要 【児童・生徒数】 人 【学級数】 学級(内 特別支援学級 学級)	
2 「協働的な学び」を推進するための取り組み(令和5年度)を紹介してください。 ※「協働的な学び」≠地域や学校を繋ぐ学び	
① 令和5年度の実践例	
② ①への教頭としての関わり	
③ 「協働的な学び」を実践・推進するにあたっての課題や悩み	
④ ③について、改善策をどう考えるか。	
⑤ 令和6年度の取り組みの計画を教えてください。	

【図1】 実践報告「協働的な学びの取組」(一部抜粋)

② 課題の整理・焦点化

実践例をもとに意見交換した結果、地域との協働的な学びにおいて、次のような課題が出された。

- ・学校が伝えてほしいことと話されることのずれ
- ・子どもの主体性が足りないままの行事(の消化)
- ・地域からの申し出、地域の方の思いの強さ

- ・地域の人・もの・ことの把握にかかる多くの時間、引継ぎの不十分さ
- ・学年での量の偏り、担任の負担、バックアップ
- ・カリキュラムマネジメントの必要性
- ・他学年の活動を知らない、他校と活動のかぶり
- ・業務改善、行事精選と活動のバランスの難しさ
- ・教頭が関係性を築くまでの時間の少なさ

副校長・教頭の役割の中でも、特に、地域と学校の「連絡調整」に課題が多かった。これは研究1年目の課題でも挙げられていた。そこで、研究課題を「連絡調整」に焦点化した。また、課題の原因の中でも、特に、活動の「ねらい」が共有されていないこと、活動についての情報が整理されていないこと、の2点を重点課題と捉え、次のように研究を方向付けた。

- ・「連絡調整」における副校長・教頭の役割は、地域と教職員（担任や担当）をつなぐことである。そのために、地域との協働的な学びを行う活動を一覧表にまとめる。（これを『データストック』と呼ぶ。）
- ・データストックにおいて、活動の「ねらい」「目的」や「つきたい資質」を明確化する。
- ・それをもとに、地域にも教職員にも、活動の「ねらい」等を共有させる。

③ 共通実践の内容の検討、実践

データストックの型について検討し、共通の項目については最低限に留め、協働的な学びにおける「地域」の範囲も各校の実態に沿った捉え方でよいことにした。また、令和5年度の行事についてまとめ、「ねらい」が明確化されていなかったものは空欄のままでよいことにした【表1】。

【表1】 データストックの型 (R5)

時期 いつ	活動の目的 つきたい資質 は何	主催 どこ	行事 名	学年 どこ	地域		学校		備考 (担当電話番号) (動き始めいつ)
					窓口 どこ	担当 だれ	窓口 だれ	担当 だれ	

まずは「教頭が把握するために使う」ものとして、年度末の完成を目指して各校で作成した。

(3) 研究の実践 (R6)

① 共通実践内容の共有、検討

令和6年度の研究メンバーで研究内容を共有し、作成されたデータストックをもとに意見を出し合った。活動が教育課程のどこに位置付けられているかを明確にするため、「教科・領域」を項目に追

加して、エクセルシートで型を決定した【表2】。

【表2】 データストックの型 (R6)

実施 日	活動の目的 つきたい資質	主催	行事 名	教科・ 領域	学年	地域		学校		備考 担当者 電話番号	備考 動き始め る時期
						窓口	担当	窓口	担当		

このエクセルシートを使い、新メンバーで新規・継続で作成した。また、作成が目的化することがないように、「地域と教職員をつなぐ」という目標に向け、以下のことを確認した。

データストック作成後は、

- ・指示を出すよりどころとし、担当教員と話をする。
- ・担当教員に対して、地域の担当者との打合せや依頼の際は活動の「ねらい」を伝えるよう指示する。

② 共通実践

各校でデータストックを作成した後の協議において、次のような感想や意見が出された。

- ・4月、5月の行事が多い。一度作ったら次年度からは楽だと思ふ。これ1つでかなり網羅される。
- ・転勤してすぐで1年の流れが分からないし、予算がついた行事も控えている。職員に紹介する際には、意義やねらいを伝えて追記等をお願いしたい。
- ・指導教諭が作成した年間行事予定をもとに一緒に作成した。行事をしながら次年度の分を入れていくと、更に有効に活用できるのではないかと。
- ・キャリア教育、地域連携として職員に表を渡した。備考の「動き出し」は大事。教頭として有効。教員が活動の目的を意識しておくことは大事。
- ・「教科・領域」を入れたのはよかった。
- ・どこを調べる、誰に聞くなど整理できてよかった。
- ・新年度初めに配布しておきたい。
- ・地域の人が関わってくれるのはよいけどやめられない。減らせる分は減らすことも必要。

意見交換後、「地域と教職員をつなぐ」実践に向け、より具体的に、以下のことを追加確認した。

- ・データストックを全職員に共有させる。
- ・担当職員に修正・追記させ、人材育成、学校運営参画意識の向上につながる声掛けを行う。
- ・「ねらい」が明確でない活動については、今後、実施の有無を検討することも促す。

(4) 検証

① 平原小学校での実践

平原小では、学校行事で、全学年を対象に交通安全教室を行ってきた。担当は生活部で、今年度の生活部主任は初めて担当する職員である。

教頭は、4月に生活部主任に声をかけ、活動の目的と打合せ内容を確認した。また、虹の松原自動車学校の担当者へ挨拶の電話を入れ、学校の今後の担当者を伝えた。その後、生活部主任が地域の担当者と打合わせ、活動の目的を共有した。

当日、教頭が学校待機となる中、生活部主任が地域の担当と協働して活動を円滑に進めた【写真1】。行事をトップダウンで行うのではなく、担当者が目的をもって行うことで、それぞれの役割を果たすことができた。



【写真1】 交通安全教室（平原小）

【成果】

- ・教頭が当該行事の目的を生活部主任と一緒に確認したことで、生活部主任は、職員への提案、児童への指導など、主体的に行事を運営し、地域と協働することができた。生活部主任としての提案が職員の心理的賛同を得られたこと、児童へ指示する姿や連携する姿勢が見られ、副次的な効果があった。
- ・データストックを全職員で共有することで、諸活動等の目的や誰がどのような役割か俯瞰できる。その結果、職員が自らの業務をより自覚することができる。小規模校で、各学年の教員数も少ないが、データストックを全員で共有するメリットは大きい。

【今後】

活動後、すぐに行事を振り返りデータをストックすることで、活動内容の精選ができ、業務改善にもつながると考える。

② 相知小学校での実践

相知小では、3年生の総合的な学習の時間に、

「相知の良さについて調べよう」をテーマに体験活動を行ってきた。昨年度までの学習内容は、①町内5か所での見学、②相知の良さの学習、③地域ゲストティーチャー（以下、GT）からの説明会、④相知の良さのまとめ、⑤GTを招いた発表会であった。今年度の担当は、今年度赴任した教務と担任である。

教頭は、地域GTとの打合せの前に、教務・担任と打合せを行った。その際、データストックを使い「教科・領域」「活動のねらい」等を共通理解し、活動計画を練った。その後、地域GTが来校され、それぞれの思いをもって、活動への要望を多く提案された。そこで、データストックを提示して「活動のねらい」等を説明し、活動内容精選の必要性、活動時期や時間の制約があることなどを伝えて理解を得た。

当日、町内3か所の見学地において、地域GTの説明のもと、学習することができた【写真2】。



【写真2】 葦野の棚田の見学（相知小）

【成果】

- ・口頭ではなく、データストックを介したことで職員間での共有が容易にできた。
- ・活動を支援していただいている複数人の地域GTから熱心な支援要望を提案いただいたが、学習計画について理解を示していただくことができ、見学地の削減には「言ってくれたらいつでもするよ」、内容削減には「学習の様子を学校に見に来てよかね」などと言ってもらえた。活動の「ねらい」などを、地域と学校が共有できたためであると考えます。

【今後】

データストックの年度更新を計画的に行う。

③ 七山中学校での実践

七山中学校では、1年生の総合的な学習の時間において、探求課題「地域の自然環境のよさと課題」のもと、玉島川の水生物調査を行っている。

担当は、昨年度も経験している担任である。

教頭は、担任に活動の「ねらい」を伝えるよう確認し、電話での依頼や打合せの様子を見守った。担任は、七山市民センター、唐津市役所環境課の職員と電話やメールで打ち合わせた。環境課の「調査目的」と学校の「活動目的」は微妙に違っていた。また、環境課の担当職員は前年度とは違う人であった。担任は、当日も、対面で両方の職員に学習の「ねらい」を再確認し、活動を行った【写真3・4】。



【写真3・4】水生生物調査（七山中）

【成果】

- ・後日、教頭が「探求課題の解決を通して育成を目指す資質・能力」の表をもとに、担任と振り返ったところ、3観点で1つずつ計3つ達成できていた。特に「実践に移そうとする態度」について、担任は、環境課の職員の「給食を残さないことが環境を守ることに繋がる」という話から、給食の配膳の際に「水生生物調査を思い出して」と声をかける生徒がいて、学級では給食を毎日完食している、と語った。
- ・環境課の職員からは、当日、河川愛護にとどまらず自然環境について広い視点で話をさせていただくことができた。担任が、活動の「ねらい」を丁寧に伝えたことが、環境課の職員の講話につながり、生徒の学びの広がりにつながったと考える。

【今後】

データストックの備考欄を有効に使い記録を残すことで、次の担当が動きやすくなるを考える。

(5) 研究の成果

各学校において、職員によるデータストックの修正・追記を通して、活動に意図をもたせたり、活動

を共有したりすることができた。研究メンバーの振り返りから得られた成果は、以下の通りである。

【データストックの修正・追記を通して】

- ・担当学年ごとに整理させたことで、早い時期から情報収集する姿が見られた。
- ・担当していない学年の活動も職員全員が共有できた。
- ・目的を確認することで児童のゴールの姿をイメージし、目標や成果指標が明らかになり、逆向き設計で活動を計画する姿が見られた。
- ・活動を見直すポイントが明確になり、業務改善につながると思う。

【データストックの活用を通して】

- ・目的を担当・児童生徒・地域と共有し、いつも目的に立ち返ることで効果的な活動ができる。
- ・目的を確認することで活動内容が適切なのかを判断でき、「活動あって学びなし」に陥りにくい。
- ・連絡調整において活動の目的やつけない資質・能力を伝えることで、外部関係団体からも改善や質の向上が図られやすくなった。
- ・動き出しの時期や、謝金の出どころ、プレスリリースの締切など、備考欄の引継ぎメモが共有できていて協力して動きやすい。
- ・予算のある計画の際、教頭が活動の目的を意識しているのでぶれずに判断でき、話をしながら目的を明確にすることができた。評価指標の作成にも役立った。

5 今後の課題

データストックは2ページ程度の表であるが、異動してきた教職員にとって、特に有効であると考えられる。また、作成することで劇的な変化は起こらないが、副校長・教頭が地域との「連絡調整」に役立つ実践を続けていけば、職員の主体性が高まり、地域との協働的な学びが推進されると考える。また、行事の精選や予算の削減にも繋がる可能性もある。持続可能な実践にするために、データストックの作成と全職員による修正・追記を継続する仕組み作りが必要である。